



2016 年 (平成 28 年)
11月号 (No. 858)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1部 150 円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

生息数が減ってきたライチョウの行く末を考え、そして守るために

古より「神の使者」として崇められてきたライチョウの生息数が減少、絶滅が危惧されている。登山者にとってもアイドルのな存在のこの鳥を「第二のトキ」にさせないために、現在、環境省の「ライチョウ保護増殖計画」など様々な取り組みがなされている。その現状を大町山岳博物館の宮野指導員に報告していただいた。

宮野典夫

ライチョウは中部山岳の高山帯に生息している留鳥ですので、人間が生活しているエリアとは大分かけ離れた存在ですが、鎌倉時代には和歌に登場し、江戸時代には生きたライチョウを徳川幕府のもとに送っている記録があり、「神の使者」として神秘性を持った鳥でした。

近年、一部の山域ではその生息

大町山岳博物館での取り組み

ライチョウを科学的な視点から探究したのは、昭和36(1961)年に市立大町山岳博物館(以下、山岳博物館)と信州大学が調査チームを編成して、北アルプス・爺ヶ岳で約150日間の調査を行ない、

目次

生息数が減ってきたライチョウの行く末を考え、そして守るために……	1
景信山で初めてのメディカル・ハイキングを実施……	5
理事就任の年齢制限等を問う……	6
追悼 笑顔と気力と励ます力……	7
東西南北……	8
活動報告……	10
図書委員会／山行委員会	
支部だより……	14
信濃支部	
図書紹介……	15
新入会員……	16
図書受入報告……	17
会務報告……	17
会員異動……	18
ルーム日誌……	18
INFORMATION ……	19
編集後記……	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……10～20時
水・金……13～20時
第2、第4土曜日……閉室
第1、第3、第5土曜日……10～18時

春の繁殖期から秋までのライチョウの生活を明らかにしました。これらの調査では分からないことを、飼育することによって究明することと、万が一にも野生のライチョウが危機的な状況になっても、飼育技術が確立していれば、その個体を活用した野生復帰ができるのではないかと考え、山岳博物館では飼育を始めることにしました。

飼育開始の昭和38(1963)年当時、ライチョウ飼育に関する資料はほとんどなく、暗中模索の状態での取り組みでした。この年は、あらかじめ卵を温めていたニワトリにライチョウの卵を預ける方法をとり、無事孵化しました。ところが、ニワトリとライチョウの習性の違いにより順調にはいきませんでした。ニワトリは夕刻早々と

巣に戻って休もうとしますが、ライチョウの雛はその時刻が最も活動する習性だったのです。その後も卵を採取して、孵卵器と育雛器を使用した管理方法や、チャボを仮親にして育てる方法を試みましたが、孵化はするものの、なかなか雛を育て上げることができませんでした。

昭和43(1968)年には、爺ヶ岳にて2家族を移動式のケージに収容し、天敵から守りつつ、人工餌に馴らす作業を約2ヶ月行ない、9月中旬、山岳博物館の施設にメス親2羽とその子どもたち8羽を移動させました。その後は順調に飼育し、翌年には2世が誕生しました。ところが、これらのライチョウは3年以内に感染症などですべて死んでしまいました。当時の



チャボによる孵化(1963年)

施設は冷房設備もない状態でしたので、一時、飼育を中断し施設整備をすることにしました。

昭和50(1975)年に冷房装置が完備されたライチョウ舎の整備が完了し、この年から再びライチョウの飼育を始め、平成10(1998)年まで、ほぼ毎年繁殖を試みています。年によって孵化率や育雛率の成績にバラツキがありますが、年間に50個体のライチョウを扱う年もあり、採卵して育てた個体を1世代とすると5世代の誕生がありました。最長飼育記録もオスで約10年、メスで約5年4ヶ月でした。

平成11(1999)年にメスが死



移動式ケージでの保護飼育(1968年)

んでオスだけとなり、繁殖の形態がとれずに、オスの飼育を続けてきましたが、最後のオスが平成16(2004)年2月に死んでしまい、約40年間の山岳博物館でのライチョウ飼育が途絶えました。

それまでの飼育状況の評価をしていただくために、平成16(2004)年に「山岳博物館ライチョウ保護検討会」を立ち上げて、有識者による検証をしていただきました。その結果、飼育に関していくつかの成果を上げることができましたが、感染症対策に課題があるなどのご意見をいただきました。この報告を基にして「大町市ライチョウ保護事業策定委員会」により平

成17(2005)年、大町市としてのライチョウへの取り組みを検討していただきました。提言ではグランド・デザインとして調査研究・環境教育・情報収集と発信などの推進、パイロット・プランとしては近縁種の飼育とライチョウ飼育の具体的手法等をいただきました。しかし、この計画を遂行するには大町市単独での実施は困難と判断し、計画を凍結して、国などの動向を注視しながら再開の時期を決めることとしました。

一方、生息域内保全の取り組みとしては、北アルプス・爺ヶ岳、蓮華岳、餓鬼岳などの生息状況調査等を進める一方、ライチョウ保護の注意標識を山小屋やテント場に設置しました。また、普及啓発としては山岳博物館の展示で、ライチョウの生態や現状についての紹介や、ライチョウ関連の企画展や観察会などを行っています。

大町市が提唱して発足した「ライチョウ会議」は平成12(2000)年から続いており、今年の第17回大会は10月に大町市で開催されました。大会ではライチョウに関する情報共有や保全の取り組みの検討を行なうほか、今年からは県

や市町村の行政関係者の連携を図る取り組みも始まりました。

国の動向

平成24(2012)年のレッドリストの改訂で、ライチョウは「絶滅の危険が増大している」から「近い将来、野生での絶滅の危険性が高い」カテゴリーにランク付けされました。

これを受けて、環境省は「ライチョウを自然状態で安定的に存続できる状態とすること」を目標に、平成26(2014)年に「ライチョウ保護増殖計画」を作成しました。この計画では大きく2つの事業を掲げています。その一つは「生息域内保全」で、生息地での個体数の減少傾向が続いていると考えられているため、生息状況の詳細な把握や減少要因の特定のための調査を行なうのと並行して、現地でのケージ保護、捕食者捕獲など具体的な対策を行なうものです。もう一つは「生息域外保全」として、健全な野生個体群が存在する現段階から、飼育繁殖技術の確立および飼育下における科学的知見の集積を行なうものです。このほかにライチョウの保護増殖事業を効果的に進め

るためには、国民の理解と協力が大変重要であることから、普及活動としてライチョウや生息環境の現状を知っていただくことも含まれています。また、人材育成や実施体制の強化も盛り込まれています。

新たな飼育への取り組み

「生息域外保全」につきましては、平成26(2014)年に環境省は「ライチョウ生息域外保全計画」を作成し、動物園などでのライチョウ飼育の指針を示しました。これによりまず、生息域外保全は段階的な進め方を想定しています。

第一段階は、試験飼育として比較的健全な個体群を安定して維持していて、すでに個体群動態が把握されている乗鞍岳の個体群をファウンダー(創始個体)として安定的な飼育・繁殖を目指します。第二段階は保険個体群の確立・維持として、近い将来存続が困難になる危険性のある個体群をファウンダーとして、保険個体群を確立・維持します。危険性のある個体群として、減少が著しいことが懸念される南アルプスが想定されています。第三段階は、野生復帰により存続可能な自立個体群を定着さ

せる取り組みの実施を念頭に、野生復帰させ得る資質を有する個体の創出および確保が可能な技術や体制の確立を目指します。

また、日本動物園水族館協会(以下、日動水協会)と環境省が協定を結び、相互に協力しながら希少種を保全していくこととなりました。そして、日動水協会の生物多様性委員会内にライチョウ域外保全プロジェクト・チームを編成して、情報共有と課題解決に向けた研究を行なっています。

近縁種スバルバル・ライチョウの飼育

東京都恩賜上野動物園(以下、上野動物園)は、大町市のパイロット・プランを参考にして、平成21(2009)年からスバルバル・ライチョウの飼育を開始しました。このライチョウは、ノルウェーのスバルバル諸島などツンドラ気候の北極圏に生息している近縁種です。その後、富山市ファミリーパーク(以下、富山FP)でもスバルバル・ライチョウの卵を入手し、2園で繁殖した個体を、いしかわ動物園・長野市茶臼山動物園・多摩動物公園・横浜市繁殖セ

ンター・那須どうぶつ王国・飯田市動物園・横浜市金沢動物園と山岳博物館の10園館へ移動し、飼育や繁殖を行なっています。スバルバル・ライチョウを用いた餌の開発、腸内細菌叢の究明などを行ない、ライチョウの飼育に役立つデータの集積をしています。また、飼育ハンドブックを作成し、飼育・繁殖技術の向上に努めています。

山岳博物館は平成27(2015)年に新たな飼育施設を建設し、富山FPからオス3羽を借り受けて飼育を始めると同時に、富山FPといしかわ動物園から卵を譲り受けて6羽孵化させ、4羽を育成しました。



ライチョウ観察会(2013年8月4日)

ライチョウの飼育

環境省はスバルバル・ライチョウによる飼育・繁殖の成果が一定の技術に達したとして、平成27(2015)年に「ライチョウ生息域外保全計画」の第一段階を実施することになり、ファウンダーを確保するために乗鞍岳にて産卵期の卵を5個、抱卵後期の卵5個を採取し、前者を上野動物園、後者を富山FPがそれぞれ孵化・育雛を担当することになりました。産卵中の巣を探すことはとても難しく、今回初めての試みでしたが、調査員の忍耐と体力で成果を上げることができました。

上野動物園では5羽生まれまし



ライチョウの育雛(2016年7月21日)



スーパーバル・ライチョウの飼育(2016年12月16日)

たが、秋までにすべてが死に、富山FPでは卵の一つが孵卵器に入れる時点ですでに発生が中止しており、4羽が孵化しましたが、そのうちの1羽が数日で死にました。残った3羽は順調に育ちましたが、3羽ともオスであり、翌年の繁殖がかなわない状況となりました。

平成28(2016)年には再び乗鞍岳にて卵を採取する方針となり、前年に引き続き産卵中の卵4個を上野動物園が、抱卵後期の卵4個を富山FPが担当し、新たに抱卵後期の卵4個を山岳博物館が扱うことになりました。それぞれの園館では6〜7月に12個の卵がすべて孵化し、現在まで順調に育つて

います。特に山岳博物館では、過去の成果を活かした育雛方法や餌を用いました。12羽の内訳はオス8羽、メス4羽です。ライチョウは1年で繁殖能力を持ちますので、来年の6月にはこれらの個体がツガイを組んで産卵をし、2世が誕生するでしょう。

むすびに

生息域外保全は事業がスタートしたばかりです。これからいくつもの課題を一つ一つ解明し、安定的な飼育・繁殖ができるよう努力していかなくてはなりません。願わくはこれらの技術が活用されずに、野生で一定数のライチョウが世代交代を繰り返してほしいと思っています。ただし、蓄積されたデータは科学的に貴重なものとなるでしょう。

生息域内保全では、皆様にライチョウと高山環境の現状をご理解いただいた上で、ゴミや地球温暖化などの問題を考え、直接的に間接的にライチョウ保全対策の一助を担っていただければ幸いです。

(市立大町山岳博物館指導員)

会員名簿の発行は見送ります

平成28年度通常総会の場において、全国の会員名簿を作成してほしいとの要望が複数の会員から提起されましたが、理事会において検討した結果、次のような問題点があることから、会員名簿の発行は見送ることとなりましたので、お知らせいたします。

(1)名簿掲載のための本人同意が必要(個人情報保護に関する法律)の定めによる。

*名簿を発行する場合、会員全員に掲載の可否を照会し、本人の了解を得られなければ、住所・電話番号等は掲載できない。

*全会員に掲載の可否を照会した場合の返信率は、総会ハガキの例から推定して3分の2程度と見込まれ、掲載拒否の会員を含めると3分の1以上の会員が掲載されない名簿となってしまう。

(2)会員名簿発行に関する支部の意見

本年9月に開催した支部合同

会議において、全国の支部長・事務局長に対し、名簿発行についての意見を求めたところ、名簿の発行を求める意見は皆無であり、支部内における会員相互の連絡等に不自由していないことから、改めて全国の名簿を発行する必要はない、との意見が多数であった。

(3)個人情報保護管理上の課題

*これまで日本山岳会本部には、会員のほか、すでに退会された方や亡くなられた会員のご遺族から、「知らない人からの寄付金の要請、あるいは心当たりのない企業からのDMが届いている。日本山岳会から名簿が流出しているのではないか」という問い合わせ、苦情が複数寄せられている。

*個人情報保護の適切な管理に関する義務は、データを保有している日本山岳会はもちろんのこと、会員一人一人が負うもので、なんらかの理由で会員名簿が第三者の手に渡り利用された場合には、損害賠償請求の対象となり得る。

(総務担当理事)

REPORT

景信山で初めてのメデイカル・ハイキングを
実施

医療委員会は、登山中に起きる病気やケガなどに遭遇した場合に役に立つ医学的な知識を実地に学んでいただきたいと、10月1日(土)、景信山にてメデイカル・ハイキングを企画した。会報8月号で20名公募し、申し込みのあった23名を受け付けた。当日は天気予報で降水確率が70%だったが、決行することにした。結果は奇跡的に全く雨に降られなかった。

当日、JR中央線高尾駅北口に午前8時30分、集合した。受講生は様々な都合で5名の欠席者があり、18名だった。内訳はJACC会員13名、多摩支部主催初心・初級者登山教室受講生5名だった。医療委員6名と合わせて24名で、小仏へバスで向かった。終点・小仏バス停の広場で受講生と医療委員の自己紹介を行なったのち、2班に分かれて出発した。

11時15分、景信山の山頂に着いた。昼食をとった後に講習を開始した。まず野口委員がハチ刺され

医療委員会 清水敏昌

について講義し、アナフィラキシー・ショックに奏効するエピペン自己注射薬を紹介した。受講生はデモ用キットを太腿に打って練習をした。

続いて秦委員は、ハチやマダニなどの標本を見せながら講義した。マダニに刺された場合、無理に取ろうとすると口器が皮膚に残ってしまうので、マダニとその周りにワセリン(オロナイン、メンソレータムなどの軟膏でもよい)をたっぷり塗ってテープで押さえ、マダニに呼吸をできなくさせる方法を実際に紹介した。秦氏が編集した虫刺されと虫よけの手引き書を配布した。さらに野口委員は、切り傷・すり傷、出血、足首捻挫、膝痛、腰痛、足ツリなどの対処について講義した。足首のテーピングについては、足首の痛みを訴えていた受講生をモデルに、簡単にテーピングできる方法を紹介した。また、自身の携行薬品を提示し、使い方を説明した。これらは野口委員

が著した『山の病気とケガ』に解説を加えたものであった。

植木委員は骨折の対処と心肺蘇生法の講義をした。デモ人形を用いて心臓マッサージの方法について動作を詳しく説明し、全員が心臓マッサージと人工呼吸を実習した。女性の参加者が多かったので、専門の泌尿器科医の立場から冷えや膀胱炎予防などの解説もあった。雨の予報だったせいか山頂は人が少なく、貸し切り状態で、茶屋の女将さんも熱心に聞いていた。女将さんによると、登山者からハチ刺されや捻挫などの相談をされることが多いそうで、とても参考になったと言う。



景信山で講義する野口講師

講習を2時間半ほど行ない、14時15分、小仏峠に向かって下山を開始した。下山路はぬかるんでいる上にゴツゴツした岩石が飛び出していて、滑ると思わぬケガにつながりそうだった。浜口委員長から「さっきの講習が役に立つことがないように、注意して降りて下さい」との注意があった。小仏バス停15時40分発の高尾駅行きバスに乗車し、高尾駅で解散した。委員5名と受講生12名で、南口の店で懇親会を行ない、盛り上がった。

感想アンケートの結果は好評だった。たとえば「ハイキングも楽しめる上に医療研修も受けられる」という賛沢で有意義な企画だった、内容は盛りだくさんだった、現地・現物に基づいて実践的だった、受講生との交流も良かった、所属山岳会で内容を広めたい、JACCの最近の流れの一端も知ることができた」などで、再度実施してほしいという希望も多かった。医療委員会としては初の試みだったが、今後の継続実施を後押しされた感じがした。なお、当日参加の医療委員会は野口いづみ、浜口欣一、植木貞一郎、秦和寿、村上和子、清水敏昌であった。

OPINION

理事就任の年齢制限等を問う

吉永英明

本会は平成24年4月1日、「公益社団法人」として新たに発足して以来、5年が経過しようとしている。この間、執行部のご努力によつて、将来の財務運営等一部に懸念が見られるものの、おおむね順調な推移をたどっているといえるが、公益社団を選択したことゝの妥当性や評価は、今後10年程度の経過を詳細に吟味して判断する必要があるだろう。

一般に、新しい形態の組織に移行した場合、5年程度経過した時点で現実に即応した見直しを求められる。先の平成28年度通常総会においても定款施行細則の一部についての提案があったことから、この際、公益社団化に際して実務を担った者として、理事就任の年齢制限と役員候補の選考システムについて検証してみたい。

理事就任の年齢制限について

平成28年6月時点の会員の年齢構成（団体会員を除く）は、総数約5000人のうち、70歳以上の割

合が52・5%、60歳以上では80・9%の高率となっている。これらの方も当然会費を納めておられ、各種行事に参加してクラブライフを楽しんでおられる。しかし、現行定款施行細則では、満70歳を超えて理事に就任できないという制限があるため、半数以上の会員が理事に就任できない。会員の間には、高齢会員の声が反映されない、会員は平等という原則に反するのではという声がある上、本部と一体的な運営が義務付けられている支部の支部長には就任についての年齢制限がなく、規定の整合性も問われている。近年、若年会員を増加させるべく施策が推進されているにもかかわらず、会員の年齢構成に大きな変化が見られず、このままでは特に管理部門を担当する人材の払底が懸念され、本年7月に実施された内閣府の実地検査では、理事就任の年齢制限はほかの法人にはなく、稀有との感想を漏らされたと聞いている。公益法人化の際の議論では、私

は「法人改革対応プロジェクト・チーム」の責任者として後期高齢者制度との関連から72歳を就任限度とすることを提案したが、理事会の意思で70歳という結論が示されたため、これによつて条文の文言を作成した経緯がある。確かに理事の若返りを図り、将来に向かつての活性化を目指すところとは理解するが、「温故知新」という言葉があるように、創立110年の伝統の継承というなかで新しい姿を模索することも重要であろう。高齢者の声が大きいと若手が畏縮するのではとの懸念も聞かれるが、「七十而從心所欲、不踰矩」というように、高齢者には知恵と経験がある上、分別も具わっている。

現実に対応した再考が求められる。

役員候補選出システムについて

公益社団化されるまでは、役員は会長、副会長といった役職区分を含め評議員会で候補者を推薦し、理事会で承認して総会に提案されていたが、公益社団化以降は、評議員会に会運営の権能を付与できなくなったため、執行部が会員の

声を聞いて理事、監事の候補を選考し、理事会の承認を経て総会に提案しているのが実状である。

本会が準拠すべき「一般社団法人法」および定款等に役員候補者選考に関する規定がない。現行のシステムでは会員の多様な意見が反映しづらく、意見聴取の範囲も狭きに失する恐れがある。

多数会員の存在を基本としたクラブである本会の特性を考えたとき、すでに会員の大多数が所属する支部を含む老壮青各層の意見を集約できる新組織を設け、自薦、他薦を含む幅広い意見を徴してある程度の集約をした上、理事会において検討し、役員候補として総会に提案するといった方策を検討すべきと思うが如何。

「万機公論に決すべし」という。「一般社団・財団法人法」第43条規定の社員提案権の存在を視野に入れた理事会の賢明な検討を望むとともに、会員諸兄における永続する本会の将来を見据えた議論を期待したい。



田部井淳子（たべい・じゅんこ）会員番号6349

1939（昭和14）年 9月22日、福島県三春町に生まれる
 1962（昭和37）年 昭和女子大 英米文学科卒業
 社会人山岳会に入会し、登山活動に勤む
 1969（昭和44）年 「女子だけで海外遠征を」を合い言葉に、女子登攀クラブを設立
 1975（昭和50）年 エベレストに女性として世界初登頂
 1990（平成 2）年 日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラストを設立
 1992（平成 4）年 女性で世界初の7大陸最高峰登頂者となる
 2000（平成12）年 九州大学大学院比較社会文化研究科修士課程修了
 2009（平成21）年 女性のための山の会MJリンク立ち上げ
 2013（平成25）年 東日本大震災以後、東北応援プロジェクトを始め、被災者を支援
 2016（平成28）年 「被災した東北の高校生の富士登山」プロジェクトを5年前から始め、400人以上の高校生が参加
 現在、76ヶ国の最高峰・最高地点に登頂
 「それでもわたしは山に登る」など著書多数

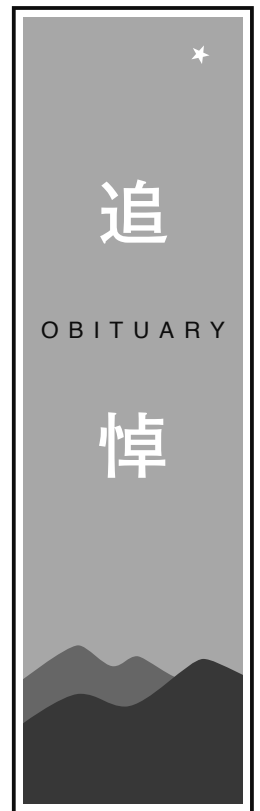
友人として、ただ悲しい。が、田部井さんの「功績」を思うと、今は「ありがとう」という感謝の言葉で見送らなくてはならないだろう。

1973年、新米の読売新聞記者として、75年のエベレスト登山許可を得た女性の山岳同人「女子登攀クラブ」を取材したが、田部井さんとの出会いだった。この挑戦の歴史的意義、そして彼女の明るさに

笑顔と気力と励ます力

北村節子

惹かれ、即、参加を志願した。以来四十余年、ずっと「仲良し」だった。10歳も年下なのにこう名乗ることを許してほしい。が、あの前向きな思考法、何事にもうろたえない判断力、それでいていたずらっぽいお茶目ぶり。私は一緒にいて、感嘆し、あきれ、なにより楽しかった。エベレストで、ポーター・経費節約のため、先遣隊の一人として田部井さんとともに5350mのBCに入ったときのこと。すでに日は暮れ、氷河上の風は身を切るように冷



たい。何百人ものポーターを返してしまおうと、巨大な山塊の内懐に人の気配はない。疲れて食欲をなくしていた若い私に、田部井さんは「子どもは寝てな。お母ちゃんがいいもの作ったげる」と言っ、コロッケを作ってくれた。行動食用ビスケットを砕いてパン粉代わりにし、貴重な玉ねぎとコンビーフを刻み、マッシュポテトと揚げたものだった。あの高所での体力、機転、手わざ、そしてユーモア。ほくほくのコロッケは、登山技術だけではない「深い強さ」の詰まった味だった。

それでいて本人は、当時「ただの主婦」という自己認識が強かった。下山時、「帰ったらバイト探さなくちゃ。お金使っちゃったし」と悩んでおり、私が「それどこじゃないよ。大騒ぎされるよ」と忠告したのに「なんで？」と聞き返してきたのを覚えている。

が、いったん、登頂者としての社会的立場を自覚してからの腹の据え方は、見事だった。講演に呼ばれる。初めはとつとつとした話し方であったのが、晩年には誰もが講演の名手と認めた。テレビに現われるや、親しみやすい笑顔と話しぶりで全国区の人気者となった。

そしてその「知名度」は、世の女性の様々な活動に拍車をかけた。特に「女性がアウトドアを楽しむこと」の背中を押し、自身が高齢に至るや、今度は「中高年だつて元気にアウトドア」のアイコンとなった。

今日、全国のお山で見かける老若男女の楽しそうな登山・ハイキング姿。私には田部井さんが創り出した日本の新風景に思えてならない。

そして今、田部井さんはまたも新しい社会的役割を果たして逝った。腹膜癌が発症したのは、2012年の3月だった。以来4年半。苛酷な闘病をごく少数にしか明かさず、あの体力と気力（と優れた医療）で継続した「東北の高校生の富士登山」応援など、各方面の活動はご存じのとおり。「癌だ、もうダメ」と沈むことで、大事な時間をムダにしたくないから」と、陽気に言っていたのけた。重病と闘って逝く、その一つのモデルを示したのである。

私は信州育ち。福島育ちの彼女とは、ときおりテントで「わざとなまって」会話して笑った。ときに現場でもそれが出た。「さあ、ここからはゆるぐねぞ（簡単ではない）。せつちゃん、いくぜい！」というあの明るい声が、今も聞こえる。

N — 東北 — — 南北 — S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

第58回 有志閑談会

古市進

長い歴史と由緒ある「有志閑談会」の58回目の会合が6月17日、小石川後楽園で昼食会として開催された。名誉会員である平山善吉、中村純二のおふた方をはじめ21名が参集し、最遠方からの参加者は大阪の宗實慶子会員であった。

まずは芳野超夫会員の発声による乾杯に続いて、田部井淳子会員から最近実践されている諸活動と心境を中心とした力強いお話があった。その後は出席者各人のショート・トークになり、自身の近況や今にして思い当たる昔の話、最近感じる世相について思うことなどが披露された。いずれも言外に各人の山への思いが偲ばれる談論風発のひとときであった。

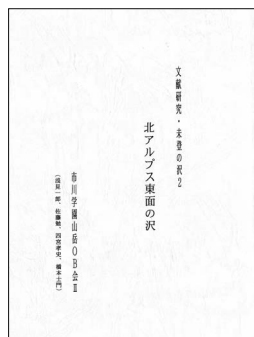
なお、田部井会員はご自身のお話に関連するデザインのTシャツや、文庫版として発刊早々(あとがき増補)の著書『それでもわたしは山に登る』を多数持参されて、最後は福引大会となつて賑やかに開きとなった。

会食の後は花菖蒲と紫陽花の庭に出て記念撮影し、解散となった。このような会合に息長く尽力されてきた世話人の方々に深く感謝したい。

北ア東面に多数の「未遡行沢」があることを文献研究で発見

佐藤勉

私は半世紀以上にわたつて山城別にどのような登行記録があるのか、調査研究を続けてきました。その総索引ともいふべき『山城別登



「文献研究・未登の沢2―北アルプス東面の沢」

行記録索引』全12巻を平成25年に完成し、図書室に寄贈しました。このことは「山」819号で紹介されています。そしてこれに基づいて私の所属している市川学園山岳OB会Ⅱの有志と「文献研究・未登の沢―上信越国境山地の沢」を小冊子にまとめ、図書室に寄贈しました。

今回はこれに続くものとして「文献研究・未登の沢2―北アルプス東面の沢」を小冊子にまとめてみました。結果は驚くべきものでした。本邦第一級の高峻山岳地帯のお膝元で遡行記録は極めて少なく、ほとんどないに等しい沢流が多数存在することが分かったのです。

我々が調査対象とした文献は主として市販商業雑誌ですから、各山岳会の会報レベルまですべて調査すれば、あるいはもつと記録は見つかるかもしれませんが、それは時間と能力の点で不可能に近い

ことです。

今回調査した沢流は梓川下流の左岸支流、島々谷、鳥川、乳川谷、中房川右岸支流、竜川谷、大所川、小滝川、青海川です。中でもあれほど広い面積の島々谷に、あれほどわずかしき遡行記録がないというのは本当に驚きでした。また、あの懐深い大所川本流に至っては中流から源流まで完遡した記録がない、というのも信じがたい気がするのです。

前回の上信越国境に比べても、はるかに遡行記録密度は低いのです。高峻山岳北アルプスのお膝元の東面の沢で、遡行記録の密度がこれほど低いとは全く予想外のことでした。

かつて市川学園山岳部OB会の坂本知忠は白神山地のまとまった最初のレポートを『山岳』73年号(1978年12月)に発表しました(なお、最初の単行本は現代旅行社刊の『本州最後の秘境―白神山地』です)。

今回の調査結果は、白神山地の未登性発見に次ぐ大きな発見であったような気がします。

そのような訳で、興味のある方は図書室に立ち寄って一瞥いただければ幸いと思います。

(正確に言うとは遡行記録が発表されていない沢)はたくさん残っている、というのが長年文献研究をした私の実感です。

山の絵礼讃 発見された風景美「遥かなる山」展に思う

小原茂延

「山の日」制定記念として、実施の年に合わせ山口県立美術館と長野県松本市美術館のコラボレーションによる絵画展「遥かなる山」展が開催されたのは、誠に時宜を得たものである。

我が国における近代登山の黎明が志賀重昂の『日本風景論』の出版による影響とりわけ「登山の気風を興作すべし」の一編が近代登山の幕開けを告げ、小島烏水を目覚めさせた。境遇を同じくした岡野金次郎とともに山岳憧憬の目を開かせ、乗鞍岳より槍ヶ岳を望見したことにより、やや無謀ともいえる槍ヶ岳登山を敢行させ、結果的にW・ウェストンとの出会いにつながり、山岳会の創立に至ったことは言をまたないところである。

この流れの一方、山岳美を絵画に

よって表現する芸術家たちの萌芽をも生んだ。新たにもたらされた西洋画を学び、J・ラスキンの『近代画家論』などに影響を受けて、山岳風景の美を近代画法で描く画家たちが輩出した。この歴史的な山岳風景画の流れを十分に見据えた今回の発見された風景美「遥かなる山」展は明治から大正、昭和10年代までにおける個性豊かな46人の画家の手になる油彩、水彩に、また版画、屏風絵等120点の作品を一堂に集めた。稀有な作品もあり、誠に得がたい企画が実現したものと思う。

作品は大下藤次郎、丸山晚霞、中村清太郎、茨木猪之吉といった近代山岳界初頭の画家および以降の山岳風景画家の名品が並ぶが、山口県立美術館では丸山晚霞の「白馬三山」を、松本市美術館では吉田博の「槍ヶ岳」をイメージとして掲げ、強烈な印象を与えていた。これに「槍ヶ岳」は、本年巡回展となった「生誕140年 吉田博展」の全270数点にも見られなかった作品であり、一連の個人蔵とともに感激ひとしおであった。

日本山岳会が産声を上げたころは、写真技術がまだ一般に普及していなかったこともあって、『山

岳』の誌上あるいは登山家の著作を飾った絵画も多く、その原画を一度に観賞できたのは、またない機会であった。大下藤次郎の「西山峠」は烏水の著『日本アルプス』中に挿画があり、中村清太郎の「黒部五郎岳」は、かつて画伯が白馬岳から望んで魅せられ、愛した山容を後年に描いたものという。本展を鑑賞して、山岳美への情熱を込めた画家の心情にまで寄り添えることができた想いであつた。

山岳画家・犬塚勉のこと

田中純夫

犬塚勉についてはご存じの方も多いだろう。2009年にNHKの「日曜美術館」で全国に紹介され、多くの反響を呼んでいる。山岳を題材とした彼の絵画を最初に観たときの衝撃は忘れられない。描かれた森林や縦走路、そして溪谷などの放つくる自然の奥深くに潜む霊気といったものが観る者の胸に深く突き刺さってくるのだ。とくに涅槃経の「一切衆生、悉有仏性」という言葉を思い出してしまった。

彼は1949年、神奈川県川崎

市に生まれ、東京学芸大学の大学院を修了、美術の教師となる。登山に打ち込むとともに山岳を題材とした絵画を数多く発表。1988年、谷川連峰・赤谷川本谷から平標山へ向かう途中、悪天候のため遭難、エビス大黒ノ頭にて力尽き永眠。享年38であった。

彼は沢の廻行のなかで展開されるヤブ、滝、草付、源流部、頂上稜線、そして草原といった行動の変化のなかに求道的、修行的な仏教的体験を重ね合わせている。

以下は彼が書き残したメモから。「自然の霊気がねらいである。仏像などがそうであるが超自然的なるものの視覚化されたもの」「登山に興味を持った、大自然の奥ふところに体一つで入ってゆくことのようにこびを知った……これは絵を描くためである。本物の絵を描くためである」「そもそも生きてあるというのは奇跡に近い。人生を、自分をすてなければ本質的な成長はない」「もつと自然に還るのだ。宗教的レベルまで自然に還るのだ」「厳しい登山者にのみ許された風景との出会い」「自然と同化してしまおう」「私が見たかったのは、人が生き、かつ死に得る決定的な視覚体験、私

自身を覚醒させるもの」等々。沢の源頭への廻行のなかで、幽かな合図を読めた仏性の内へと彼は帰入していったのだろうか。

先般大学の講義で「山と死」というテーマで犬塚勉を取り上げた。単なる遭難問題ではなく、実存的な問いとしての死と、登山という人間の企投の営み。そして犬塚を掘り下げるための対称軸として、勝手ながら山野井泰史氏を置いた。山野井氏の『アルピニズムと死』は大変な反響を呼んでいる。両者は基底において通ずるところは多いが、しかし山野井氏はやはり冒険家という分類になつてしまう。もう紙幅がないが、犬塚勉が山と生と死を巡つておのれの絵画表現のなかに結晶させたものに共感するアルピニストは多いことと思う。それはアルピニストは自然の対峙者ではなく、彼もまた大いなる自然のほんの一部にしか過ぎないのだから。犬塚の絵の中には、山に登ることの意味を求めて根源（源頭）へと遡つた果ての答のひとつへの予感が幽かに仄いてるように思えるのだが。

犬塚勉の作品は奥多摩町「せせらぎの里美術館」で毎年、常設展示されている由。

活動報告

図書委員会

小谷コレクション—信州大学付属中央図書館—の閲覧

図書委員会有志で8月18日に、信州大学中央図書館（松本市）に所蔵されている小谷コレクションを閲覧した。故・小谷隆一氏は、若いころから山岳書の収集に熱心だったが、小林義正氏の旧蔵書を手してからは、コレクションにいつそう熱を入れて、内外の山岳関連書収集に一生を捧げたといつていいだろう。国内新刊書や古書はもとより、英国、フランスなどの古書店から情報を集め、オークションに参加して、世界的な「小谷コレクション」にした。この経緯やコレクターの苦心と歓喜ぶりは、小谷氏の著書『やまなみ帖』（茗溪堂、1981年）に詳しい。

同氏は、2003年に母校である信州大学（旧制松本高校）に、全



手前のキャスター付き木箱にシュラギントワト図版が収納されている

8000点を寄贈し、信州大学は特別室を設けて、整理、所蔵している。爾来、同図書館は、市や博物館と提携して、このコレクションの展示公開や講演会活動が続けていて、さすが「岳都」の大学図書館の活動は活発だ。折しも、入り口のロビーで「次代につなぐ山岳図書」と題して、信州大学学士山岳会会員の寄贈図書、遠征写真や図

日本山岳会の各委員会、同好会の活動報告です。

書館職員の山岳写真が展示され、「小谷コレクション」の一部も飾られていて、コンパクトだが質の高い展示だった。

さて、肝心の「小谷コレクション」は2階のゆつたりとした特別室に書架とガラスケースに整然と並べられている。検索システムも完備している。我が山岳会も自慢のシユラーギントワイト図版は、金箔の装飾文様が散りばめられて、さらに堅固な木製箱に格納されて入り口近くに鎮座している。コレクション担当の折井匡氏は、自由に手に取って観るよう取りはからつてくださった。山書好きには、感嘆とため息の出っ放しの名著や古典書の山である。

たとえば英国山岳会の『アルパイン・ジャーナル』は創刊号(1856-57)から2012年号まで揃っている。創刊号の鮮やかなエッジ色の牛革装表紙に彫られた氷壁でアックスを振るウクライマー2人の金箔押しは、160年を経ているとは思えない生々しい美しさだ。ヴィクトリア朝のアルプス登攀最盛期の記録にあふれ、書評や装備研究などの内容構成と版型

が現在とほぼ同じであるのも興味深いことだった。内外の豪華本や稀覯本を忙しく観ていくが、小林義正氏の旧「高嶺文庫」蔵書印と並んで「小谷文庫」印が押されていたり、小谷氏が書き込みをした跡もあつたりして、コレクションの歴史を感じる。マロリーの自筆書簡が添えられた本など、収集家のマニア的な一面も想像する。古地図も広げて観ることができると、「秋山紀行」の挿絵の色は美しく、一同は思わず読み耽ってしまった。保存状態が良好な蔵書が多いのも特徴かもしれない。コレクターの熱意に圧倒されつつ、次々と観ていくが、膨大な種類と量は見切れるものではない。再訪を期して図書館を辞した。時間をかけてゆっくりと閲覧をお薦めしたい。

帰途、松本市美術館で開催中の山の日制定記念「遙かなる山」展を観た。なかなかの名品を集めていて、見ごたえがあつた。美術館を出たら涼しい夕風が吹き始めていた。ウェブサイトは信州大学附属図書館で検索。閲覧の申込みはEメールまたは電話0263-33712172へ。

(松澤節夫)

山行委員会

北ア・餓鬼岳・黒部五郎岳縦走に参加して

今回の北アルプス縦走は、4月に入会して初めての山行委員会主催山行への参加でした。前泊・後泊含めて6泊7日という長い日程も初めてで、人生最大の挑戦とも思える今回の山行で、自分が何を思い、どう過ごせるのか、とても不安であり楽しみでもありました。

初日にホテルで一同顔を合わせ、ベテランの方々ばかりで圧倒されましたが、和やかな雰囲気にな、少し安心しました。台風の影響もあり天候が心配でしたが、予報に反して最終日までは好天に恵まれ、青空の下、北アルプスの大パノラマを楽しみながら、白沢登山口から大風山・餓鬼岳・燕岳・西岳・槍ヶ岳の山頂を踏むことができました。槍の穂先には、嬉しくて2回も登ってしまいました。最終日はドシャ降りのなか、槍沢経由で上高地へと降りました。とても充実した、とても良い経験となった5日間でした。

初日以外は、様々な事情から行程が変更となりました。黒部五郎



白沢・魚止ノ滝付近に行くメンバー

岳は、残念ながら未登となつてしまいました。最初は、悶々とする思いがありました。また、リーダーが「遅れています、急ぎませんよ」とニコニコと仰るのがなかなか理解できませんでした。

山行計画を立て、そのとおりに実施されれば問題ないのですが、グループ登山で大切なのは「仲間とともに行く」ということだと気づきました。このことに気付かされたことが、今回私の最大の勉強でした。私は今回の山行を通じて、参加された仲間の皆さんが大好きになりました。お一人ずつに感謝の念で一杯です。山経験の少ない私は、色々なことを教えていただき

ました。だから、皆さんと一緒にける所まで行けたことがとても嬉しかったのです。Tさんの仰っていた「また来ればいいよ」のひと言が、とても腑に落ちました。「安全に皆で」これができたから、今回の山行は予定の行程どおりではなかったのですが、楽しくかけがえのないものになったのだと思います。

最終日は温泉泊まり。私は、5日ぶりのお風呂で雨に濡れた身体を温め、なんとも言えない充実感に包まれました。そのなかで、ご自身の入浴は後回しに、全員の靴の中敷きを外し、新聞紙を入れて下さったIさん。感激しました。私もこういうことに気づける人になりたいたいと思いました。大先輩のNさんから、「マナーの良い、立派な山女になりなさい」とのお言葉をいただき、Nさん目指していきたいと思いました。山行は、そこに集まった人たちが作り上げるのだと痛感しました。素敵な仲間がいて山がある限り、私の冒険は続きます。

(東京多摩支部 中原三佐代)

剣岳・早月尾根

JAC山行委員会企画の剣岳登

山に北海道から参加した。馬場島に前泊し、早月小屋2泊の予定だ。9月3日(土)、新幹線の黒部宇奈月温泉駅で関東からの7名と北海道からの2名が合流し、富山地方鉄道に乗換えて上市駅へ。車窓から見えるはずの剣は雲の中だった。上市駅よりジャンボタクシーで馬場島へ。車道と並行して流れる白萩川の水の青さが目に止まった。16・10馬場島荘着。長野からの1名と合流。美味しい夕食をいただき、明日に備えて20・00就寝。

9月4日(日)6・30、登山口発。合同慰霊碑に手を合わせ、剣岳まで7km、標高差2200mの登りをスタートした。重い荷物、長い急登に苦戦し、何度も足が攣って迷惑をかけた。同行の3名とともに早月小屋到着は先行隊より30分遅れの12・20となる。本当に大変な登りだった。外のベンチで昼食。下山予定の6日は、台風接近で芳しくない、という小屋のご主人の情報により予定を変更。明日は山頂を目指したのち、一気に馬場島まで下ることが決まった。夕食までのゆつたりとした時間、外の激しい雷雨をよそに、つまみを囲んでの山談義は愉快だった。

9月5日(月)、富山平野の街明りが優しく広がる。4・30、ヘッドランプを頼りに出発。朝焼けのころ、木や岩を手でつかみながらの登りが所々に現われ始める。まぶしい太陽が顔を出したが、尾根の北西面では岩山に遮られて日陰となり涼しく、いっぽう南東面では立山側からひんやりとした気持ちの良い風が吹き、とても快適な登りとなる。烏帽子岩から獅子頭、カニのハサミを越える。ミクリガ池の湯煙、どつしりとした薬師岳、遠くは富士山などが次々と姿を現わし、8・15、山頂に飛び出すと360度の大展望。山座同定、写真撮影であつという間に滞在時間の20分が過ぎた。早月小屋11・55発。谷からガスがわき上がる中、慎重に下る。標高1400m付近から雷を伴う本降りの雨となったが、登頂の余韻からか楽しささえ感じた。16・10登山口着。充実の1日となった。

9月6日(火)7・30、予定より随分早い上市駅での解散。冒険とも思えた早月尾根からの剣岳登頂。チャンスを与えてくださった方々、お世話になった皆さんに感謝します。静かな剣を味わえた、心に残る山旅だった。

(谷口美咲)

会津・御前ヶ岳、志津倉山に参加して

御前ヶ岳と志津倉山は気になる山で、過去に何回か計画したのだが機会がなく、山行委員会の計画に参加した。志津倉山の最寄り駅会津宮下駅へは1日6本の只見線で行き、駅からバスもなく交通不便な立地。御前ヶ岳も人里離れた大変不便な所。今回のように、入山しにくい山城のチャーターバス山行はありがたい。

バスは新宿を7時過ぎに出発し途中休憩、昼食を済ませ2万5000分の1地形図「大芦集落」の最



御前ヶ岳の岩場を行く

奥、畑小屋御前ヶ岳登山口に着く。あいにく天気は曇り模様。登山口には御前ヶ岳の伝説を紹介した案内表示板がある。山名から何か由緒ある山ではと思ったが、案内には治承の乱で平家討伐の拳に敗れ、高倉宮以仁王の妃・紅梅御前が追っ手を逃れ隠れ住んだ山、との伝説が明記されていた。山深いからこそその落人伝説。

登山口から沢を渡り、1軒の人家の前から登山道へ。雨の降った草の茂る道からアカマツ、ナラ、シラカバの林を行くと、回遊ルートの分岐に出る。左、山の神ルートは現在登山道が崩壊し、廢道になっているとの説明がリーダーからある。したがって右、御前ルートをピストンすることに。緩やかな道を行くと標高900m付近にはミズナラの太木が目立つ。直登するような急な岩場が現われ、這いつくばるようにトラロープ、木の根につかまり、ぬれた岩に細心の注意を払いつつ皆さん無事通過。しばらくして平坦地に「紅梅御前桜木姫お住いの跡」との案内表示が。よくも姫様がお登りになったものか。参加者から美味しいリンゴを全員にいただき小休止。周辺のブナ林やカエデは、10月に入って

も暑さが続き、紅葉はまだ早かった。平坦な道から間もなく山頂に着く。曇り空ながら山頂北側から博士山、明日登る志津倉山、磐梯山を望めた。休憩後、三角点前で集合写真を撮り、元来た道を下山した。下山後、会津宮下駅に近い今晚の山宿「宮下温泉ふるさと荘」で冷えた体にちょうど良い湯加減の源泉かけ流しの温泉に浸かることができありがたい。食事も美味しく、宴会での山談義に皆さん懇親を深めることができた。

2日目は早い朝食を済ませ、6時過ぎに宿を出る。空模様は曇りで、念のため雨具を着用。志津倉山の巨大なスラブの雨乞岩を見るのが楽しみ。登山口から安全祈願の志津倉の鐘を鳴らし、沢沿いに進む。「クマ出没」と、この時期に活発に動く「スズメバチ注意」の大きな看板を見る。リーダーからクマ除け鈴を着けるよう指示を受ける。見通しの悪い霧雨にけづる林道を笛を吹き鳴らし、山おやじに挨拶を送る。間もなく回遊コースの細ヒドコースとの分岐を過ぎると、巨大な滑り台「雨乞岩」の一枚岩を望めた。幾筋もの流れは白糸を見るようで、ここから望む紅葉

は天下一品らしい。残念ながら紅葉には早かったが、スラブの上部まで全容を見ることができた。

猫鳴岩下に沿う登山道は崩壊し隠れていた。大沢を離れ石楠花尾根の急登に入る。露岩に設置の鎖、ロープを使い、ぐいぐい体を引き上げる。岩つばいやせ尾根を濡れた岩、木の根に注意をして健脚ぞろいの皆さん難なく通過する。間もなくゴウウマツの古木が立つ三本松に到着。目の前に屏風岩が現われ、足元はすばつと切れ落ちていた。休憩後、緩やかなブナ原生林を進むと稜線のブナ平で、左に行くと地形図の志津倉山本峰があるが、道はヤブに阻まれ見えな。右へはつきりした登山道に導かれ、待望の志津倉山に立つことができた。晴れていれば御神楽、飯豊、那須、田代帝釈、七ヶ岳などが見えるはずだが、残念ながら霧雨で視界不良だった。

下山は細ヒドコースをとるが、大辺峠への分岐はヤブで分からなかった。間もなく急降下に入り、糸滝を過ぎても本格的な気の抜けない急な下りである。ロープ、岩に設置した珍しい「コ」の字状のアンカーを埋め込む階段を30段ほど慎重

重に下る。道は緩やかになり、すべてがブナ林のブナ平に。途中、落ち葉に埋もれ、道が確認できなかつたがリーダーの先導により通過し、登りの大沢コースに合流する。各所の急峻な要注意箇所ではリーダーからの適切なアドバイスにより、参加の皆さんは安全にバスの待つ登山口に着くことができた。道標をクマがcaじった跡を多く見たが、実物には遭遇せず、ほかの登山者にも会わず、静かな静かな登り甲斐のある奥会津の山行だった。

(柴山武)

西上州・四ツ又山、鹿岳、荒船山山行

紅葉の時期に、4つの鋸の歯のピークを持つ四ツ又山、ラクダの背のような鹿岳、日本二百名山の荒船山に登り、岩場のスリルと展望を楽しむ山行に参加した。

上信電鉄の下仁田駅に向かう車内で、数見リーダーが参加者の紹介をした。タクシーに乗り大久保登山口まで。天狗峠あたりでは、木々の隙間より遠方の紅葉に太陽が当たり綺麗だった。四ツ又山の4つのピークではそれぞれの神像



四ツ又山での記念撮影。後方は鹿岳

に出会い、11時50分、四ツ又山頂上899・5mの三等三角点に着く。先客が2人。6名でやつとの広さで場所を譲っていただき昼食。マメガタ峠を過ぎ、直登、岩、やせ尾根、梯子等々で息もできないほどゆとりのない所を過ぎ、14時30分、1人がやつと立てる鹿岳一ノ岳着。快晴に恵まれ、奇岩の妙義山、雄大な浅間山、明日の荒船山とひなびた山村風景に見とれる。二ノ岳は時間の都合で断念。下りも急下降で休む場所もなく、ナメ沢に着いてゆつくりとお茶タイム。大久保登山口からはタクシーで静かな民宿おかしらへ着く。夕食は「おつみっこ」(すいとん汁)で温ま

り、久しぶりに山の歌を合唱した。

2日目は食事6時半、宿を7時20分出発。8時10分、駐車場着。荒船不動尊で本日の無事を祈願して登山開始。昨日とは違って歩きやすい道。星尾峠を9時通過。しばらくすると雨。天気予報では降水確率少なかったのに? と思いつつ雨具を着る。山頂分岐9時半。行塚山に向かうと突然、霜柱が降ってきた。初めての経験だったのでびつくりした。枯枝には霧水。霧水が落ちてきたかと思ったら、霜柱が上から落ちてきたとか? 霧水も今年は初めてで感動した。

荒船山で一番高い行塚山(1423m)の三等三角点9時45分着。

名残惜しい霜柱を後にしてトモ岩へ向かう。遠方から見ても平坦な登山道を2km歩くと10時20分に着く。絶壁で今年も落ちた人がいるので注意を、と言われた。北海道から参加された方が、休みの度に地元の名物を差し出され、ここでもご馳走様でした。紅葉は見頃で、赤・黄・緑のコントラストが綺麗。帰りは相沢登山口を目指すのが、木の階段が長く続き、ぬれた枯葉で滑る道を慎重に下った。タクシーで荒船の湯に。下仁田ネギやコンニャクの重いお土産を買い込み、西上州のマッターホルン・小沢岳を眺めながら下仁田駅に着いた。

(前 美智子)

支部



だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

信濃支部

第6回 中部ブロック 4支部交流会

今年で第6回を迎えた中部ブ

ック4支部交流会は、10月1日(土)、2日(日)の両日、信濃支部主管により長野県木曾町で開催された。一昨年9月27日、突然の噴火で63名もの死者、行方不明者を出した御



八合目・女人堂での献花

嶽山火山災害から2年。この悲惨な災害を風化させないため、また御嶽山の現状を正しく理解するため、いまだ深刻な風評被害が残る木曽であえて開催しようというものだった。越後、山梨、静岡、信濃の4支部から合わせて68名の会員が参加した。

1日は、「御嶽山と共に」と題した公開講演会を木曽町福島の木曽郡民会館で開催。会員のほか地域住民や行政の職員なども出席した。信州大学の竹下欣宏教授による「火山の恵みと災害」御嶽山2014年噴火に学ぶ」の講演では、御嶽山の成り立ちや今回の噴火の特徴のほか、マグマの形成など意外

と知らない火山の基礎についても講演いただいた。続いて、地元木曽町役場消防防災課から「噴火後の木曽町の取り組み」として、登山者に向けての火山情報の伝達システムや山小屋の防災対策などについて解説がなされた。

講演会終了後は、盛大に交流会が催され、地元木曽町の木曽踊り保存会から正調木曽節が披露され、踊りの指導も行なわれるなど、木曽の夜を満喫し交流を深めた。

2日は、九合目上部までの登山が解禁されている御嶽山へ交流登山。前日講演いただいた竹下准教授も同行、現場での地質の解説なども行なわれた。また、八合目・女人堂では、鎮魂のため献花を行ない、遭難者の冥福を祈った。今年の秋は、不順な天候が続いていたが、この日ばかりは登山日和となり、盛りの紅葉を楽しめたのは、本当に幸運というほかはなかった。全員無事下山したのを確認し、交流会を閉じる。この登山が、御嶽山への登山者の呼び戻しの一助になれば幸いだ。

次回は来年5月、山梨支部主管により、笛吹川で開催の予定。

(米倉逸生)



図書紹介

登山外来へようこそ

大城和恵著



2016年8月
角川新書 200円
新書判 920円+税

書題からわかるとおり、著者は医師、北海道・大野病院に勤める勤務医である。日本人として初めて国際山岳医の資格を取得し、北海道警の山岳遭難救助アドバイザーも務める。

国際山岳医とは、山で起こり得る病気の予防と治療ができるほか、遭難者を助けることのできる知識やスキル、また、山岳救助関係者とともに活動できるサバイバルやレスキューに関する十分な知識、体力をも求められる。

ネパール・トレッキングに行った際に、高山病と脱水症で具合が悪

くなっている日本人登山者を助けたが、その対応が正しかったか自信が持てず、山での医療についてもっと勉強しようと思ったのが目指すきっかけ。「起きた遭難に駆けつけるより、まず遭難を減らすこと」を心がけるといふ。そんな意味でも本書は、医師の立場から書かれた、山岳遭難防止の入門書といえる。

山岳での三大死因は、「外傷」「心臓突然死」「寒冷障害(低体温症・雪崩埋没)」だといふ。滑落や転落による「外傷」は、トレッキングによって体力とスキルのアップを図ることで、危険を回避することも可能だ。「心臓突然死」は、脱水やカロリー不足、寝不足や体調不良、心配ごとなどの精神的ストレスが原因で起こり、事前の心臓検診が大切。「寒冷障害」は、冬の山に思われがちだが、実は夏の発生が多く、春や秋にも見られる。「食

べる」「風や雨、雪からの「隔離」「保温」「加温」が防止のキーワードとなる。

また、著者は2013年に三浦雄一郎氏が80歳でエベレスト登頂に成功した際、チームドクターとして6500m地点まで同行している。同氏の登頂成功は、「平地の半分のスピード、ゆっくり標高をあげてゆく余裕のあるスケジュール」と、「30分ごとの十分な水分補給」が大きな要因となったという。

「今日、死ぬ必要はないから、登るのはやめて帰ろう」「冒頭に書かれた吹雪の中でのパトナーの迷わぬ決断だ。当たり前のことだが、生きてさえいれば、また山には挑戦できる。医師の立場から書かれた山岳遭難防止の知恵書、特に初心者の方にお勧めしたい。

（木根康行）

母がつくった山小屋

黒百合ヒュッテ六十年

米川正利著



2016年9月
山と溪谷社
四六判 103頁
1600円＋税

本書の著者は、北八ヶ岳「黒百合ヒュッテ」の二代目オーナーである。この小屋は、今から60年前に著者の母君である米川つねのさんが造ったものである。本書の前4分の1では、つねのさんの生い立ちから小屋を造るに至った経緯が記されている。林業の仕事を生業としていた著者の父親（昭和28年に57歳で死去）は生前、口癖のように、「八ヶ岳の黒百合平はよい所だ、いつか別荘を建てたい」と言っていたそうだ。

父親の死後、苦労を重ねるなかで、つねのさんはご主人の遺志を継いで黒百合平に別荘ではなく、山小屋を建設することを決意する。当然周囲の反対に遭ったが、その並々ならぬ熱意で賛同者を増やし、行政の許可も取って、昭和30年に建設に取り組み、翌年から営業を開始した。終戦からそれほど経っていないこの時期に、女手一人で営業小屋を始めようと決意したその先見性と行動力には、ただただ敬服するのみである。

成人前からの著者の山に向き合う心の葛藤と小屋を引き継ぐ決断までの経緯が記されていて興味深い。初めての冬期営業（越冬生活）、

小屋の増設、エコトイレの設置、チエンバロを荷揚げしての音楽会開催などのご苦労が淡々と述べられている。そして、10年前に息子さんに小屋の経営を委ねて以降は、山を下りても、「蓼科・八ヶ岳国際自然学校」理事長や「八ヶ岳スーパートレイルクラブ」理事長などの要職を務め活躍している様子が記されている。そして、黒百合平の四季や自然保護の大切さを山小屋管理人の視点で書き記している。さらに後半では、山に関わる関係者とはもとより著名な作詞家など、著者を取り巻く仲間との交流録は読んでいてとても楽しくなる。

本書のもうひとつの特徴は、写真が一枚も掲載されず、表紙を含めて各章の最初には、著者の描いた水彩画が飾られていることである。この画や無類に好んだお酒の話など書全体を通して著者の人柄が滲み出ている感があり、以前に山と溪谷社から出版された2冊（『山小屋物語 北八ヶ岳黒百合ヒュッテ』と『ほろ酔い黒百合』）と併せて読むことをお勧めしたい。

本書は、山と溪谷社とamazonで購入することができる。

（森 武昭）

図書受入報告(2016年9~10月)

著 者	書 名	頁/サイズ	発 行 者	発行年	寄贈/購入別
上高地自然史研究会(編)	上高地の自然誌:地形の変化と河畔林の動態・保全	189p/21cm	東海大学出版部	2016	編者寄贈
井上達男(編著)	山と人 第21号(神戸大学山岳部 100周年記念 特別号)	109p/30cm	神戸大学山岳会	2016	発行者寄贈
宮本数男	ふるさと福井の山	213p/21cm	エクシード	2016	著者寄贈
内田嘉弘・竹内康之(編著)	京都府山岳総覧:京都府339山案内	254p/21cm	ナカニシヤ出版	2016	出版社寄贈
菊地俊朗・三井嘉雄(監修)	ウェストンが残したクライマーズブック	163p/21cm	信濃毎日新聞社	2016	松本市山岳観光課寄贈
風間嘉隆	北岳:80歳の新雪	151p/20cm	白山書房	2016	出版社寄贈
J.ハント(著) 吉田薫(訳)	エベレスト初登頂(新訳):The Ascent of Everest	363p/20cm	エイアンドエフ	2016	出版社寄贈
小澤観一	「山」わが道をゆく	188p/21cm	小澤観一(私家版)	2016	著者寄贈
小川さゆり	御嶽山噴火 生還者の証言(ヤマケイ新書)	254p/17cm	山と溪谷社	2016	出版社寄贈
内田榮一	関東一円 古城址ハイキング	252p/21cm	新ハイキング社	2016	出版社寄贈
志水哲也	果てしなき山稜:襟裳岬から宗谷岬へ(ヤマケイ文庫)	374p/15cm	山と溪谷社	2016	出版社寄贈
工藤隆雄	マタギ奇談	191p/19cm	山と溪谷社	2016	出版社寄贈
富山県警察山岳警備隊(編)	富山県警レスキュー最前線	303p/19cm	山と溪谷社	2016	出版社寄贈
根本達久	空から見た日本の名峰:根本達久写真集	27cm	山と溪谷社	2016	根本哲生氏寄贈
工藤隆雄	新編 山小屋主人の炉端話	287p/19cm	山と溪谷社	2016	出版社寄贈
若菜晃子(編)	mürren(Vol.19, 2016 July):Hitoshi & Rebuffat	48p/18cm	mürren編集部	2016	近藤和香氏寄贈
宮家準	修験道と児島五流:その背景と研究	485p/21cm	岩田書院	2013	著者寄贈
佐藤勉(編著)	北アルプス東面の沢:文献研究・未登の沢 2	53p/26cm	市川学園山岳OB会II	2016	編者寄贈
米山悟	冒険登山のすすめ(ちくまプリマー新書 No.264)	203p/18cm	筑摩書房	2016	出版社寄贈
高澤光雄	随筆集 山旅句	225p/18cm	北海道出版企画センター	2016	著者寄贈
Sthapit, Chandra Kumar	Nepal Postage Stamps Catalogue 1881 - 2015	130p/24cm	Deepak Manandhar	2016	平野嘉彦氏寄贈

平成28年度第6回(10月度)理事会
議事録
日時 平成28年10月12日(水)19時00分~20時40分
場所 集会室
【出席者】小林会長、吉川・大久保・山田各副会長、神長・佐藤各常務理事、勝山・中山・野口・大槻・落合・直江・星・谷内各理事、平井監事
【欠席者】山賀理事、重廣監事
【オブザーバー】節田会報編集人
【審議事項】
1・平成28年度秩父宮山岳賞の審査について
秩父宮記念山岳賞審査委員会からの推薦を受けた候補者について審議した。(賛成14名、反対なしで承認)
2・日本山岳会とHATJの共催による「山の日」記念植樹について

HATJより要請のあった「山の日」記念植樹の共催について審議した。(賛成14名、反対なしで承認)
3・平成28年度会長特別表彰について
平成28年度会長特別表彰候補者について審議した。(賛成14名、反対なしで承認)
【協議事項】
1・名誉会員の推薦について
平成28年度名誉会員候補者の推薦について協議した。(小林)
【報告事項】
1・9月受付分の入会希望者15名について入会承認を行なったとの報告があった。(小林)
2・第4回アジア・太平洋登山医学学会、第37回日本登山医学学会合同学術集会の後援依頼を承認した。(野口)



3・NHKプラネット名古屋支社からのウェストン画像の使用申請を承認した。（神長）

4・学生部2015年ネパール登山隊について会計報告があった。（吉川）

5・平成28年度支部合同会議における各支部からの意見について報告があった。（佐藤）

6・事務局職員に関する規程を現行の法令に則して見直しているとの報告があった。（佐藤）

7・平成28年度第2回評議員懇談会を11月7日（月）に開催するとの報告があった。（佐藤）

8・平成28年度晩餐会の準備状況について報告があった。（佐藤）

9・広報サイトの立ち上げと会員サイト見直しの進捗状況について報告があった。（谷内）

10・景信山メディカルハイキングの実施について報告があった。（野口）

11・「山」10月号の発行予定について報告があった。（神長）

【連絡事項】

1・富士山国有林におけるニホンジカの重点的な捕獲実施 9月21日（水）～2月17日（金）

2・北極圏1万2千キロと妻への手紙」展 9月9日（金）～11月8日（火）板橋区・植村冒険館

3・「第17回ライチョウ会議長野大会」 10月15日（土）～16日（日）大町市文化会館大ホール

4・日・米・独オオカミフォーラム2016横浜の開催 10月27日（木）横浜市

5・岩橋崇至作品展「北アルプス」 9月27日（火）～10月30日（日）千代田区J C I I フォトサロン

【今後の予定】

1・平成28年度第2回評議員懇談会 11月7日（月）17時～ 集会室

2・支部長会議 12月3日（土）10時30分～ 京王プラザホテル

3・年次晩餐会 12月3日（土）13時30分（受付開始）京王プラザホテル

4・次期理事会等 11月度常務理事会 10月31日（月）18時30分～ 集会室

11月度理事会 11月9日（水）19時～ 集会室

5・事業計画・予算等 平成28年12月7日（水）平成29年度事業計画・予算（提出依頼）

平成29年1月15日（日）平成29年度事業計画・予算（提出期限）

・平成29年1月25日（水）平成28年度事業報告・会計報告（提出依頼）

・平成29年2月28日（火）平成28年度事業報告（提出期限）

・平成29年3月31日（金）平成28年度会計報告（提出期限）

・平成29年6月24日（土）平成29年度通常総会（主婦会館 プラザエフ）

・平成29年6月24日（土）平成29年度通常総会（主婦会館 プラザエフ）

・平成29年6月24日（土）平成29年度通常総会（主婦会館 プラザエフ）

・平成29年6月24日（土）平成29年度通常総会（主婦会館 プラザエフ）

・平成29年6月24日（土）平成29年度通常総会（主婦会館 プラザエフ）

・平成29年6月24日（土）平成29年度通常総会（主婦会館 プラザエフ）

・平成29年6月24日（土）平成29年度通常総会（主婦会館 プラザエフ）

・平成29年6月24日（土）平成29年度通常総会（主婦会館 プラザエフ）

・平成29年6月24日（土）平成29年度通常総会（主婦会館 プラザエフ）

会員異動

物故

箕岡三穂（5788）16・10・30

田部井淳子（6349）16・10・20

恩田善雄（6666）16・10・17

退会

池戸誠二郎（7560）

中田 勇（8712）埼玉

辻 斉（12169）富山

青木 司（13352）越後

小林昌道（13353）群馬

田中國興（14624）東海

種田郁太郎（14720）

ルーム日誌 10月

3日 総務委員会 YOUTH CLUB

4日 常務理事会 スケッチクラブ

5日 図書委員会 山行委員会

6日 YOUTH CLUB

7日 緑爽会

11日 山岳研究所運営委員会 ア

ルパインスキークラブ ス

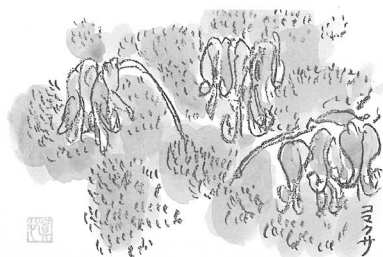
ケッチクラブ

12日 理事会 休山会 山想倶楽

部

13日 フォトクラブ 山岳地理ク

ラブ 九五会



17日	総務委員会 資料映像委員会
18日	スキークラブ
19日	青年部 三水会 つくも会
20日	科学委員会 YOUTH CLUB
21日	YOUTH CLUB 山の自然学研究会
24日	フォトクラブ YOUTH CLUB
25日	デジタルメディア委員会 緑爽会
26日	支部事業委員会 麗山会
27日	公益法人運営委員会 学生部 01会 山遊会
28日	総務委員会
31日	常務理事会 10月来室者 448名

◆「田部井淳子さんを送る会」 献花のご案内

去る10月20日、本会会員であり、世界初のエベレスト女性登頂者として知られる登山家・田部井淳子さんが亡くなりました。田部井さんは、長年、山岳自然環境活動に尽力され、東日本大震災では東北北の高校生の富士登山」などで被災者の方を支援されてきました。そうした田部井さんへの惜別の思いと感謝の気持ちをこめて、お別れの会を開くことになりました。

会員の方にも献花していただき、足跡をたどるビデオなども上映される予定です。なお、お供物、お花、お香典などは故人とご遺族の意向もあって固くお断りいたします。

日時 12月18日(日)14時半～16時

*場所 昭和女子大グリーンホール

TEL 090-2140-3226 (今田)

インフォメーション



◆山岳救助隊員による講演会のご案内

埼玉県内で起きた遭難救助に従事されてきた隊員のお話を聞きます。熟練者だからこそもう一度初心に還り耳を傾けてみませんか？講演のテーマと内容…「どの山でも登山届を出そう。いざというときにあなたを救う」28年度の遭難事故例を基に、現在の登山者の実態を分析。遭難事故をなくするにはどうするかを考える。

講演者・飯田雅彦氏(埼玉県警山岳救助隊副隊長)

日時・平成29年1月21日(土) 13時30分～17時(受付13時)

場所・仲町川鍋ビル 8階会議室 (JR大宮駅東口、徒歩5分)

参加費・500円

申込み先・埼玉支部安全登山委員会・宮川

TEL 090-2648-1947

◆編集後記◆

●10月は2つの大きなウォーキング・イベントに招待されました。鳥取県倉吉市では3日間の「ワールド・トレイル・カンファレンス」が、石川県金沢市では「ウォーキング・グラッド・フェスティバル in 金沢」が4日間開催されました。倉吉では世界19ヶ国58のトレイルが参加、各国の現状を報告してくれましたし、金沢では市内から里山まで、数千人がそれぞれウォーキングを楽しんでくれました。

●とりわけ金沢では、保育ならぬ「歩育」活動を進めていました。幼少期にしっかりと歩かせることによって、心身ともに健全な子どもに育てるという考え方です。お子さんやお孫さんたち、未来のアルピニストのために、どうぞ「歩育」と「食育」をお忘れなく。(節田重節)

日本山岳会報 山 858号

2016年(平成28年)11月20日発行
 発行所 公益社団法人日本山岳会
 〒102-0081
 東京都千代田区四番町5-4
 サンビューハイツ四番町
 TEL 東京(03)3261-4433
 FAX 東京(03)3261-4441
 発行者 日本山岳会会長 小林政志
 編集人 節田重節
 Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
 印刷 株式会社 双陽社

